

信濃教育会教育研究所を目指す方々へ

信濃教育会教育研究所は、昭和22年（1947年）民間の教育職能団体である信濃教育会により創設されました。創設時の願いは「長野県に根を下ろした、教育現場の具体的な問題の研究と先生方の研修の場であること」「教師は国が決めた方針にそのまま従うのではなく、広い視野と見識をもつこと」の二つです。

現在もその意志を引き継ぎ、研究が教育現場の実際に即し「具体的実践的性格」をもつもので、研究の成果を教育現場に返していくことが期待されています。

研究所の運営で特徴的なことを紹介します。

（１）「振り返り」と「学び合い」の重視

現職教師が今までの自分の実践を振り返り、研修員・所員が共に学び合う

（２）実践課題の掘り下げと自身の変化の自覚

研修員の主体的な問題意識に基づき、事例から自信の有り様を掘り下げる

（３）教師としての視野、識見を広め資質の向上

県内外の研究会等への参加や協力校・協力施設での体験・実習を行う

（４）テーマ研究会と報告会

年間23回のテーマ研でのレポート検討と1年次中間・最終報告会を行う

「研修員の方々は、これまで『教える』立場でおられたが、『学ぶ』立場に身を置くことになります。これは、『教えている』という感覚を忘れて、『学んでいる』という感覚に浸るわけです。自分で学びたいことを、学びただけ学ばせてもらえる。こんな素敵なことって、人生に何度もあるわけではありません。」
これは、佐伯 胖所長の言葉の一部です。

子どもたちは、生き物が大好きです。

毎日田んぼに出かけて生き物探しをするC子がいいます。

C子は捕まえたドジョウを指先でつつき、動く様子を何度も確かめます。

「うわぁ さわれた！」「あっ これ死んだふりだぁ！」「ドジョウってさあ！
平らな所に寝ると土の所にいる気分になっているから寝るみたいになるんだよ。だから死んだふりとか言われるんだ」

子どもたちは自然の中で、様々な発見をしていきます。それは、自然が子どもたちに語りかけてくる声でもあります。その声を子どもたちは、敏感に感じとって語りかけていきます。

私たちは、子どもたちの語りかけてくる声を敏感に感じとれる教師でありたいと願っています。

研究所では、自分の具体的な実践の姿を「振り返り」、所員や研修員との共にする「学び合い」を大切にした取り組みをしています。

自分の新たな一歩を拓くために、共に学び合いませんか。